

他者に意思を伝える絵画は物の形を描き、文字は物の形を抽象化した記号からうまれる。描かれた絵画と文字はどのようなメッセージを伝えているのだろうか。



絵画土器 芝辻遺跡
弥生時代後期（1～2世紀）

弥生土器に絵画が登場するのは弥生時代中期後半で、後期には記号のような抽象的表現が盛んになる。三列に並んだ爪の圧痕は抽象化された竜という見方もできるが、その意味するところはまだ十分に解き明かされていない。



付札木簡 平城京左京二条二坊
奈良時代（8世紀）

奈良時代の政治行政は文書のやりとりが支えていた。いずれも平城宮に近い二条大路北側溝から出土した天平20年（748年）の貢進物の付札で、1は淡路国（兵庫県）からの庸米の付札である。2は遠江国（静岡県西部）からの鮎の塩煮干、達筆な筆跡は文字の全国への浸透を如実に示している。



「養老」刻書土器 平城京右京三条三坊
奈良時代（8世紀）

須恵器小壺の肩部に「養老□□□十五日」と養老年間（717～724年）の年月日、底面に「本」の一字を焼成前にヘラで刻む。貢進物に直接、生産地で記されたものとみられる。

とうす
刀子
おびとり
帯執金具

平城京左京二条二坊・右京二条三坊
平城京左京五条四坊
奈良時代（8世紀）

木簡の訂正などに用いる小刀で、奈良時代の役人の必需品。帯執金具は刀子の鞘に付く、ひもを通すための金具。そのひもで刀子を腰に吊していた。



陶硯 平城京跡各地
奈良時代（8世紀）

文字を書くための用具、筆・紙・硯・墨は文房四宝として珍重された。奈良時代には隋唐の影響を受けた円形の硯面をもつ焼き物（須恵質）の円面硯が多く用いられ、須恵器蓋杯を硯として転用したものも多い。後半になると平面形が漢字の「風」に似た風字硯（箕形硯）、宝珠硯、鳥頭硯などさまざまな硯が現れる。石硯が一般化するのは鎌倉時代以降である。



「相撲」墨書土器 平城京左京二条二坊
奈良時代（8世紀）

平城宮に近い左京二条二坊から出土したもので、「相撲節会」と関るものとみられる。左右対抗の相撲は豊凶を占う神事でもあった。

墨書土器 平城京跡各地
奈良時代（8世紀）

奈良時代の墨書のある土器は杯、皿、蓋など食器に多く、役所名、人名、年号の他、記号、習書、落書もあり、一字墨書が数多い。内容物を表すものもあるが、意味の特定ができないものも多い。



文字瓦 平城京跡各地
奈良時代（8世紀）



記号瓦 大安寺旧境内
奈良時代（8世紀）

瓦にもへら書き、押印（刻印）などで文字が記されたものがある。「修」「理」の文字は修理司を表すものとみられ、「土師」「真依」「日奉」などの押印は品質管理のための瓦工人の人名とみられている。

記号「**3**」は大安寺式軒瓦で確認されているものである。厚さ1ミリほどの金属板で押されたとみられ、軒丸瓦は内面に、軒平瓦は瓦の紋様のほぼ中心に押されている。焼成前に付けられた記号だが、その目的は不明である。